

平成二十二年二月二十八日(日)

湯島かゝり根津へ

東風吹かば

匂いおこせよ

梅の花

あるじなしとて

春な忘れそ

菅公



越谷市郷土研究会

第二七二回 史跡めぐり案内

日 時 平成二十二年一月二十八日(日)

集 合 東武線・越谷駅 東口 午前九時

コ ー ス 越谷駅 —— (東武線) —— 北千住駅 —— (千代田線) —— 新お茶の水駅

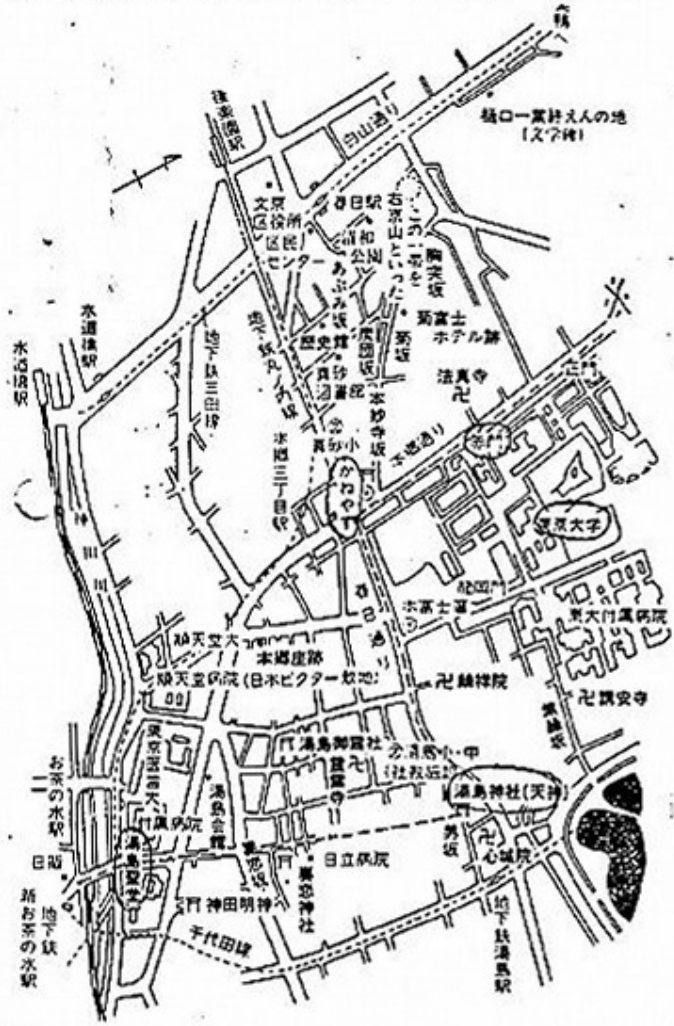
..... 湯島聖堂 湯島天神 本郷三丁目 東京大学 (赤門・三四郎池) 昼食

..... 弥生坂 根津神社 千駄木駅 —— (千代田線) —— 北千住駅

—— 越谷駅 (解散)

案内者 野村 勝八

参加費 二,000円 (交通費・資料代ほか)



★ 湯島・根津・本郷台へ

今日「史跡めぐり」する地について若干の説明をしておきたい。台東区に接し文京区の東側の高台が「本郷台」とよばれる地域である。縄文の時代から人が住み、以来、米作り、武家屋敷、大学校等貴重な歴史を重ねてきた地。

不忍通・本郷通・春日通に囲まれていて、湯島・本郷・弥生・根津・向丘・千駄木の町がある。

不忍通は、その名から想像出来るように、不忍池のほとりから根津を抜け駒込、護国寺をとる道で、文京区を包み込む形となっている。

春日通は、湯島大神の台地を断ち割ってつくられた。

(家康の入部前のこと) 切り通し坂を西にのぼってくる道で麟祥院に墓のある春日局にちなんだ名らしい。

本郷通は、本郷三丁目を東京大学の西側をとおり、追分まで旧白山通とに枝わかれし、旧白山通は中山道になる。

文久元年、将軍家茂に降嫁した皇女和宮が東下した時に、利用された道であること有名。

本郷通をまっすぐにゆくと、埼玉の岩槻にいたる。したがって岩槻街道ともよばれる。岩槻城は、ご存じの通り太田道灌が築いた。

太田道灌は、江戸城を同じ頃に(長禄元年)築いており、岩槻城と江戸城との連絡用道路として、本郷通り(岩槻街道)が作られたものと想像できる。

江戸時代になると、本郷通りは、将軍が日光へ参拝するときに使われた。このために「日光御成街道」ともよばれたりした道である。

「日光御成街道」は、「当研究会」において詳しく研究されていて、一〇回にも及ぶ「史跡めぐり」が実施されている。

諸先輩の博識に敬意を表したい。



ゆっくりと散策するにふさわしい「本郷台」である。

「本郷台」に話をもちます。

徳川家康の江戸市街地の造成の基本は、低い湿地を埋め立てることだった。その造成地から、本郷台地をながめると、堂々たる陸地に見えたとはいえない、事実平均標高二五メートルもあるといわれれば、当時の人々の感覚を想像するに台地は「壁」に思えたのではないか。

湯島天神の境内から、不忍池を見下ろすと山に登ったような錯覚さえする。どこに行くのも坂道を抜けなければならぬ。

閉子坂・無緑坂・弥生坂・菊坂・炭団坂という名までついた坂もある。かつては、文豪といわれる森鷗外・夏目漱石・樋口一葉等が暮らした町でもあり、蛇足ながら「下町」・「山の手」の語源となつた地でもある。



お茶の水駅を出て聖橋に立つと、右側に樹林におおわれた一部が見える。湯島聖堂である。聖橋は、北に孔子を祀る湯島台があって、南の神田駿河台にはニコライ堂（ロシア正教）がある。両所をむすんでいるから「聖橋」と名がついた。湯島聖堂は、江戸末期までの幕府の唯一の官学として存在した。湯島に聖堂があったればこそ神田川をへだてた神田界限において学習塾や書翰商がさかえたのである。

湯島聖堂の歴史を簡単に記す。
寛永九年（一六三二）

林 羅山、私邸内に孔子廟を建て、私塾としての学問所をひらく。

元禄三年（一六九〇）

孔子廟には、孔子の聖像と顔子・曾子・子思・孟子を祀り「先聖堂」と命名。五代將軍綱吉、湯島の地六千余坪を林家に与え孔子廟を移転、先聖堂を大成殿と名づける。さらに、大成殿及び付属の建物を聖堂と総称した。

寛政九年（一七九七）

敷地を拡張、昌平坂学問所（昌平黌）を開設。日本最初の官学となる。

寛政十一年（一七九九）

老中松平定信の改革により、大成殿を規模拡張の上、新築した。

明治三年

明治新政府が昌平黌を接収、「大学校」と称し、学校行政の最高機関とした。

大正十一年（一九二二）

聖堂は国により史跡に指定される。

大正十二年（一九二三）

関東大震災により、聖堂他が全焼。

昭和十二年（一九三五）

聖堂（大成殿）復興、耐火構造の建物に作り替えられた。第二次大戦に耐え現在にいたる。

※ 林 羅山（一五八三—一六五七）

大学頭を世襲する林家の当主。

京に生まれ、臨済宗の諸寺で儒学を学ぶ。

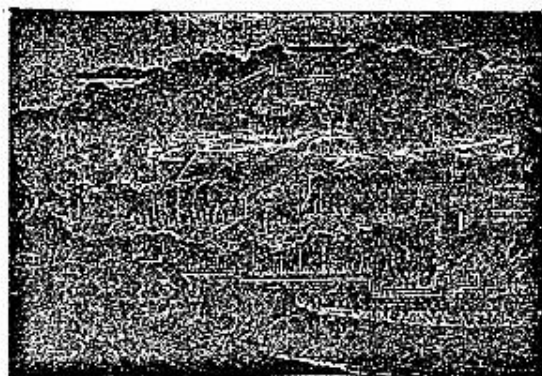
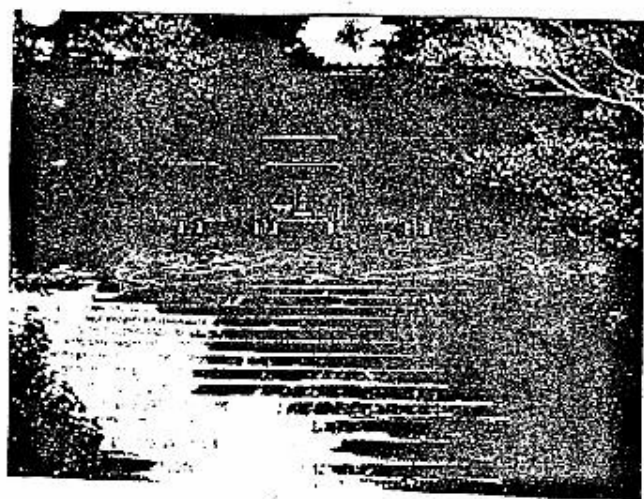
家康より、朝鮮との国交修正のための文書官のような仕事をあたえられる。

その後、二代將軍秀忠の侍講（へじこう）としておおいに力を發揮した。

※ 公開講習会

湯島聖堂（管理する斯文会）では、明治の頃から、公開講座を併設した。町のひと達も受講していたようである。

今も、中国の古典を中心に、一流の教授陣による一級の講座が開かれていて、受講生があとをたないという。



江戸寛政の聖堂
（聖堂大成、竹野光氏画）

★ 湯島天神八神

いうまでもなく湯島の社は、菅原道真をまつる天神の社である。

文和四年(一三五五)郷民によって建立されたといわれる。文和四年といえは室町幕府初代の足利利尊のころで、南北朝の争乱のさなかだった。

「菅原道真」の人となりについては、第二七〇回史跡めぐり資料(宮川先生記)で詳細に書かれておられるので参照願いたい。

その後、太田道灌が再興した。道灌が江戸城を築いたのは、八代將軍足利義政の時、湯島天神を再興したのは、江戸城の鬼門(丑寅・北東)の鎮めだったとの見方もある。

幾たびの火災に合い改修されてきたが、現在の社は平成七年一月に建て替えられた。家康より五石の朱印地を賜るが、一方、谷中の天王寺・目黒不動とともに江戸三宮として幕府の公認を得大いに栄えた。

しかし、湯島天神の華やかな社は明治になって一層輝きを増してゆく。

「湯島天神の華やかな社は明治になって一層輝きを増してゆく。」

「湯島天神の華やかな社は明治になって一層輝きを増してゆく。」

主人公の新進のドイツ文学者早瀬主税は柳橋の芸妓お萬と二世を契る仲で、その仲が恩人の大学教授酒井俊蔵に知れて、別れろといわれる。

主税は少年時代、筆の力、といわれたスリで、縁あって本郷真砂町に住む酒井教授にひろわれ、こんにちの身になった。主税は、真砂町の先生、のことは抗しがたく、お萬をよびだしてそのことを告げる。

よび出した場所が、芝居の新派では、湯島天神の境内ということになっている。初演は、明治四一年東京新富座においてだったそうである。

天神の境内には、むろん梅の木があり、瓦斯灯もある。鏡花の筆塚・「新派」と彫られた石碑もすえられていて、神社と新派の結びつきの強さを強調しているようである。

※ 月次祭

毎月 一・十・十五・二十五日

湯島の白梅

曲 詞

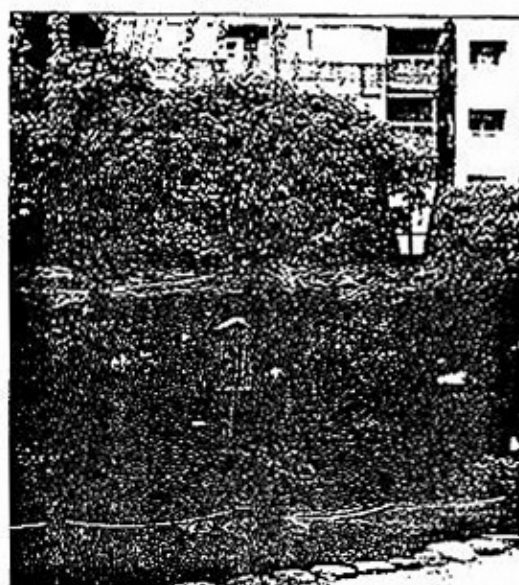
佐伯 孝夫
清水 保雄

(昭和一七年に作られた唄)

湯島通れば 思い出す
お萬・主税の心意気
知るや白梅 玉垣に
のこる二人の 影法師

忘れられよか 筒井筒
岸の柳の緑むすび
かたい契りを義理ゆえに
水にながすも江戸育ち

青い瓦斯燈 境内を
出れば本郷切り通し
あかぬ別れの中空に
鐘は墨絵の上野山



(1716-36)

★ 本郷三丁目

文政元年(一八一八)幕府が江戸の市域を確定

江戸の町は、家康入府以来、町づくりを力をもそぎ続けた。江戸八百八町といわれた町数がいまや千七百町近くなり、人口も百万人を超えて、さらに膨張し続けている。その人口の約半分は武家関係者だが、武家や商家の奉公人・土木・建設労働者という都市労働力を支えるため、江戸は常に外部からの人口流入を必要としていたという理由があったが、特に、明暦の大火(振袖火事)の後、奉公人・出稼人・農村から凶作による生活困窮者等が集まり、江戸区域外に数多く居住するようになった。このように、郊外に新しくできた「場末町」は、江戸町奉行所の管轄外であるため、犯罪者の捜査や、民政上での把握が困難な状況となってきた。

どこまでが江戸であるか線引きができていないため「江戸追放」を申し渡されても、涼しい顔で場末町で暮らす者もあり、かねてより、奉行所は頭を悩めていた。

こうした事態に対応するため、幕府評定所は「江戸朱引作図」を作成、これまで寺社奉行所が、江戸御府内としていた区域を、正式に追認し江戸の府内域を公式に確定した。

今回の朱引によって、南は品川宿、西は代々木村、上落合村、北は下板橋宿、上尾久村、東は木下川村までが江戸に組み込まれることとなった。

本郷もかねやすまでは江戸の内

この古川柳には、二通りの受け方ができるのではないかと?

素直に「かねやす」までを江戸と認める肯定派、

「かねやす」までも江戸かよ、という疑問派。

いずれにしても、御府内から本郷までは遠かったのである。

享保年間兼康友悦という人が、本郷三丁目の角に、店をひらいて「乳香散」という、粉の歯磨粉を売った。大いに繁盛して江戸中に知られるようになったという。

本郷三丁目には「かねやす」ができて繁華になったのかよくわから

ないが、その「かねやす」が現在もある。商いの中身はかわったが、

店を出ると、軒下の化粧タイムルに「かねやす」を説明した

教育委員会のプレートがはめこまれている。

また、本郷三丁目付近は、東京大学医学部が開校した関係からか

医学に関する専門書店や、医療機器を扱う企業が多い地域でもある。いまは、酒類店も出来、学生の町といえそうな雰囲気がつよい。



本郷も
かねやすまでは
江戸の内

かねやす

★ 東京十八學子

本郷の東大敷地が、江戸時代の加賀前田百万石の上屋敷だったことは周知のとおりである。明暦三年一月の振袖火事というもともと、加賀前田百万石の上屋敷は、現在の千代田区丸の内一丁目あたりにあった。江戸時代最大といわれる火事で焼けた。その後の防火計画により、空地をつくること、道路をひろくすること、町家の草葺を禁じることなどが盛り込まれ、江戸城のまわりにある大名屋敷をことごとくとりぞき空地とすることとした。このため、加賀前田家は、移転せざるをえなくなり、代替地として本郷に大きな地所をもらった。のちの東大構内の主要部で、本郷から不忍池にいたる十万三千坪という広大なものである。しかし、安政年間起きた大地震により屋敷は潰滅的被害を受け隣にちかい状態となったという。この邸跡に、明治九年（一八七六）まず医学部がうつつきながら、本郷での東京大学の歴史が始まる。

東京大学は、旧幕府の遺産を継いでいる。旧幕府は、神田一ツ橋に洋学機関として開成所をもっていた。新政府はこれを接收して開成学校とし、やがて大学南校とした。理工科系統の学問の府で、南校、というものは、昌平舎からみた方角である。ほかに大学東校が設けられた。旧幕府の医学教育機関を接收したもので、これを神田和泉町の旧藤堂藩邸にあつた旧幕府の病院に移した。ここは昌平舎からみて東にあたる。この医学教育機関は、その後、東京医学校と改称し、ついで本郷台に移ってから現在の東大医学部になる。大学東校の充足が明治二年、東京医学校と改称したのが明治七年であった。

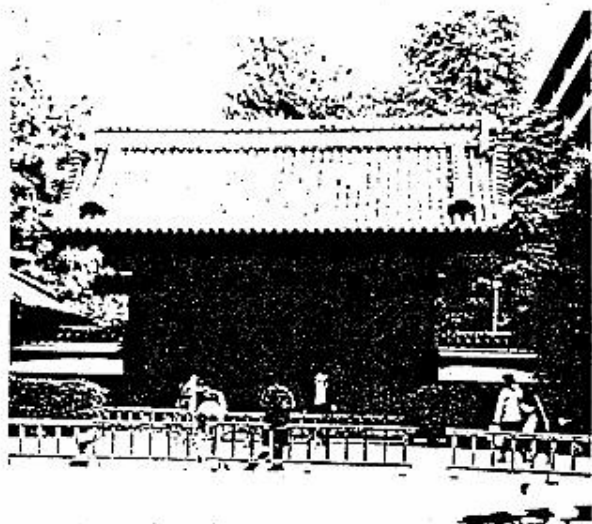


その後、新政府はカネをそそぎこんだ。教授から雇員の守衛にいたるまですべてその給料は国庫から出た。そうした人達は数千人もいたといわれる。その上、多額な研究費や書籍費、付属病院之設備費やら消耗品の費用などがそそぎこまれた。

本郷台は、東京大学を中心とした独自の文化圏を急速に確立していった。以降、東京大学は明治十九年に帝國大学となり、明治三〇年（一八九七）東京帝國大学と改称、昭和二十四年（一九四九）に旧制の第一高等学校及び東京高等学校を合わせて、現制の東京大学となる。



※ 赤門



※ 三三四郎池

第一一代將軍家齊（いえなり）は、数多くの子供がいた。幕閣の仕事の多くは、將軍の娘たちの嫁入りさきをみつけることであり、加賀前田家にも白羽の矢がたった。姫の名は、溶姫（やすひめ）といった。文政六年に縁組の沙汰がきまったため、前田家では、御守殿（御主殿）を普請した。

將軍家から降嫁した奥方の場合、奥に住まず、御守殿とよばれる独立した一郭に住むものとされていた。門も建造され、慣例として朱に塗られる。この門が現在に残っている「赤門」である。

庭園も造られ、「梅の御殿」とよばれたが、今はその面影はない。

加賀前田家が本郷のこの場所に広大な屋敷をもらったのは大坂夏ノ陣（六一五）がおわってからで、本格的に造園がはじまるのは、三代將軍家光の寛永一五年（一六三八）の頃といわれている。

前田家は、この庭園を育徳園と名づけた。池の名を心字池とよんだ。心という字の形で池を掘るのは、それ以前からもおこなわれてきた。池畔の景観に変化ができるのである。

池の水面は、台地よりずっと低く、池畔から見ると、まわりの山の樹々は深い。回遊することも出来る。

夏目漱石の小説「三三四郎」の主人公三三四郎が、この池畔で美彌子という女性と会う場面がある。

小説の重要な部分である。そして三三四郎は東大の文科の学生である。そんな関係から、いつかこの池は三三四郎池と名がついた。



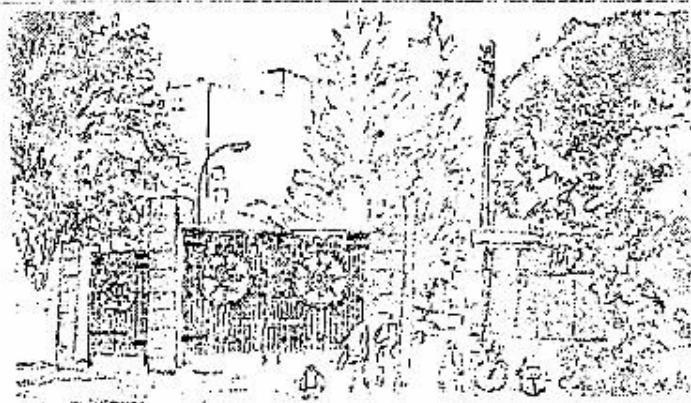
※ 弥生 坂

稲の渡米は根日本人の暮らしを一変させた。米だけでなく、鉄器から土器。蒸製品までセットになって伝来した。さらには水田のそばにムラが造られ、日本社会の原型ができあがった。稲は、走るようないきおいで東方につたわり、この本郷に達したのはいつ頃のことなのか興味のわくところであるが、弥生町で発見された弥生式土器の年代が弥生中期（紀元前後）のものと判明したことから推定することができるのでは。

弥生式土器の発見は、明治一七年（一八八四）三月、三人の学生によるものであった。その後、このあたりが都市化して発見場所がわからなくなった。

とりあえず、弥生町二丁目の路傍に、「弥生式土器発掘ゆかりの地」という碑がたてられており、ざっとこの辺だということを示している。

☆ 弥生式土器等について、宮川先生より詳しいお話を伺います。
ご期待ください。





本郷通りから言問通りを右に折れ坂を下ると、不忍通りに入る。下町情緒あふれる通りで、両側の商店街がどこかなまめかしく、街灯の飾りまでもが粋である。

その不忍通りを、千駄木方面に約一〇分歩くと「根津神社」につく。

石の鳥居をくぐると参道になっていて、山門がある。

権現造の社殿を持ち、壮麗な雰囲気漂う神社として有名。

権現造といは、本殿と拝殿を和の間(幣殿)で連結させ、一つ屋根でまとめた様式をいい、桃山文化が生んだ神社建築様式である。

根津神社は権現造の變等生といわれている。

拝殿の前面には、唐門を配し、この唐門から左右対称に透扉を出して社殿を囲んでいる。外は朱漆塗りが主体で金色のレリーフで装飾されていて、幣殿欄間の透かし彫りの彫刻や、拝殿正面、柱頭の唐獅子の彫刻

目をみはるものがある。

かといって、装飾過剰とはいえず、くろぐろとした剛健な感じがするとの印象を述べているのは、司馬遼太郎である。

さらに、京の宮につかわれている朱は、目にいたいほど強いが、江戸期以来の、東京の神社の朱は、日枝神社も、神田明神も、この根津神社にしても

おさえこんだ黒ずんだ朱が用いられている。

この江戸風の朱色が気分をおちつかせる、とも書いている。

特殊な朱とらえたようだ。

造営にあたった大人たちは、東照宮造営に係わった人達の係世代の棟梁だったかもしれない。

香りが、どこか東照宮を感じさせるものがある。

この絢爛豪華な社殿が造られたのは、寛永三年(一七〇六)のこと。

六代将軍となる家宣(いえのぶ)を叔父綱吉の嗣子(あととり)と定め江戸城内に引き取るときに邸を撤去し、跡地に天下無事のため、天下普請により造営させた神社なのである。

したがって、この境内はもとは、六代将軍家宣の、甲府中納言時代の旧邸があったところである。

境内は、手入れがゆきとどき、つつじが有名で「つつじ祭り」の時期になると大変な賑わいになるという。

池もある。この池の水は、東大構内の三四郎の池に通じていると説明板に記されているが、本当かもしれないと、何故かおもしろい。



水戸殿

水戸殿

水戸殿

水戸殿

小笠原信濃守

有馬美衛佐

大田羅中守

大田羅中守

水戸殿

水戸殿

水戸殿

水戸殿

上野下町

加賀中納言殿

不忍池

不忍池



神原式部大輔
板倉撰津守
天光寺
本妙寺
長泉寺

加賀中納言殿

本多美濃守
菊坂基町

東京
神原式部大輔
板倉撰津守
天光寺
本妙寺
長泉寺